

コウノトリ湿地ネットニュースレター



10号 2010年8月1日発行
コウノトリ湿地ネット
豊岡市城崎町今津1362
電話 0796-20-8560



7月23日 出石川の幼鳥たち (撮影 花谷英一氏)

8羽が巣立ちました

今年は7月末段階で、放鳥コウノトリから、6羽のヒナが巣立ちました。まず、戸島ペアから2羽、そして赤石ペアから1羽、新しいペアからとして、日撫ペアから1羽、郷公園内の仮設巣塔での、野生ペアから2羽の計6羽です。(百合地では、巣立ち前のヒナが3羽育ちつつあります。)

他に、日高町山本の放鳥拠点から、2羽が巣立ちました。現在、8羽が新たに豊岡の野外のコウノトリに加わりました。野外のコウノトリは7月31日現在で44羽です。(豊岡外にいるコウノトリ、行方不明のコウノトリも含む。)

戸島のヒナたち (撮影 北垣和一氏)



6月11日共に飛立つヒナ



湿地の深みにはまった幼鳥。すべてが初めての経験です



田結地区でのコウノトリの餌場づくり

(湿地ネット代表 佐竹節夫)

今年も住民総参加で作業が行われました

昨年の7月、一帯に広がる放棄田を湛水して水辺の生きものを増やし、コウノトリが舞い降りる餌場にしていく作業が住民総参加で行われたことは既報のとおりです。昨年の作業は、適地と思われる個所に杉板を使って畦を5本設置することがメインでした。結果は良好ですぐに湿地状態となり(写真1)、戸島のペアが頻繁に訪れては採餌していたのですが、月日の経過と今春の増水で畦の中央部が抉られ(写真2)、湛水機能はほとんど喪失されてしまいました。畦の弱い個所に流水が集中したためにその前後が水路状態となり(写真3)、作業前では全体が湿田状だったものがむしろ水はけが良くなってしまったのです。せっかく大量に生んでくれたアカガエルの卵塊(写真4)もほとんど流されてしまいました。畦が細く弱すぎたようです。



村人集合！(写真5)



写真1



写真2

したがって、今年の作業目的は畦を太く強くすることです。水の流れを分散させたり、一気に水を防ぐことは、今秋に実施される県の土砂災害防止工事の様子を見てから考えることにしました。



写真3



写真4

7月11日、参議院選挙投票日の日曜日の朝、雨の中を約50名の村人が集合しました(写真5)。外部からは当会その他、今年は東京から日本農業研究所の岸康彦さん、日本生態系協会の大見享子さん、それに復建調査設計(株)も助っ人として加わりました。大見さんはこの作業のためにわざわざ来られ、復建は社長以下8名の大部隊です。

まず、通水している畦の中央部に杉板を縦に打ち込んで止水し(写真6)、約50cm上流に昨年同様、板で堰を設け、



写真6

その間に土を入れて太く強くしました。また、2本の畦を新設しました。各畦を見てみましょう。グループごとに個性が出ているのは愛嬌です。

(写真7)左右の地盤が高いため、中央部のみ補強されました。

(写真8)谷幅一杯に板を並行に設置。人数が多かったので仕上がりも一番強固？

(写真9)中央部を凸型にして水の流れを左右に分散する。

(写真10)こちらは畦塗りのように仕上げられた。

(写真11)新設の畦。全員でかかるが、この頃にはもう体力はへろへろ。



写真7



写真8



写真9



写真10

当たり前ですが、畦を新設するのも幅を太くするのも新たな土地を使います。当然、その土地には所有者がおられ、その境界線は入り組んでいます。けれども、ここでは湛水に適地と見るや、みんなでその場に杭を打ち込み、土を盛って畦を造成していきます。その瞬間に元の境界線は分からなくなり、湛水後は一帯が湿地です。奥山ならいざ知らず、民家の近くの田んぼなのに。「勝手にそんなことしていいの？」当初、私たちは戸惑い、「後で揉めなければいいが」と不安でした。

今年の作業日、相変わらずみんな元気で明るさ一杯です。争いまでにはならなくとも、陰口くらいはあるのではないかと危惧は杞憂に変わります。一層、住民の「共有資源」意識が進んだのでしょうか？

田結地区の皆さん、助っ人いただいたみなさん、来年もがんばりましょう。



写真11



今年の繁殖について

(湿地ネット会員 宮村さち子)

放鳥コウノトリの野外でのヒナの巣立ちが成功して今年で4年目を迎えた。今年は、7月末までに、新たに6羽のヒナが飛び立った。この4年間、産卵、ヒナの巣立ちと順調に進んでいるように思えたが、今年の様相はまた、新たな局面を迎えたような気がする。人間にとっての課題も明らかになりつつあると思える。ここで、各ペアの様子から見ていきたい。

戸島ペア

順調に子育てが進み、無事、2羽が巣立った。巣立った後、ヒナたちは戸島湿地内に留まり、親からの給餌に頼って1カ月ほど過ごした。昨年は巣立ち後間もなく、ヒナたちは戸島湿地を離れている。昨年のヒナたちを遅く感じるが、また、戸島湿地内にできるだけ留まってほしい、という、人間の勝手な思いからは今年のおねだり上手のヒナたちが嬉しいとも思え、複雑な心境である。戸島のペア、そしてヒナたちが今年は留まっていることは、カエルなどの餌生物が確実に増えてき、戸島湿地の環境が整ってきたことを示しているともいえる。ここ最近はずいぶん自分で餌を探しているヒナたちがいつまで戸島湿地に留まってくれるか、期待しつつ見守っているところである。

赤石ペア

今年は赤石巣塔で1羽のヒナを巣立ちさせた。一昨年、福田の巣塔でヒナ1羽を巣立たせたが、父親がペアのオスではないことが判明している。昨



ジャンプする赤石ヒナ

年は今年と同じ赤石の巣塔で産卵したが、孵化までに至らなかった。今年の孵化が成功するかどうか、注目を集めていたが、無事、巣立ちまで

に至った。今年は別のオスとの交尾は確認されていないので、ペアのヒナと考えていだろう。

野上ペア

今年も昨年同様、しきりと野上の電柱に巣をかけた。が、つぎつぎと、巣を撤去された。最終的には、以前のたんぼの中にあった巣塔が、野上コウノトリ増殖センター前の湿地に移された。そこで4月末に産卵、5月末に1羽孵化したが、すぐに死亡が確認されている。どちらにしても、巣塔の移動が遅かったのではと思う。そして赤石ペアとの関係だ。両者の巣塔はわずか1kmぐらいしか離れておらず、テリトリーが重なり合っているのではないかと思われる。実際に今年、両ペアが、電柱をめぐる激しい争いを繰り広げた。赤石ヒナも、巣立ち後、野上ペ



福田たんぼで他のコウノトリを威嚇する389

アに攻撃されている。巣塔を建てるにあたってのテリトリーの考慮が必要ではないかだろうか。

今後は

今年は日高町山本のケージ内放鳥拠点からも2羽のヒナが巣立ちし、現在野外にいるコウノトリは44羽となった。(豊岡外に出ているコウノトリも数羽いる)豊岡盆地でのコウノトリの生息数としてはリミットに近付いているのではないだろうか。豊岡外の生

息可能な地域との協力が必要になってきていると思う。実際に、野外のコウノリたちの一部は、日本全国に飛び立っている。コウノリたちを迎えた地域では、生息環境を整えようと、いろんな活動が始められている。それらの地域、愛媛、岡山、福井などとの一層強固な協力関係が必要なのでは。各地での生息環境の整備等に、豊岡が協力できることはたくさんあると思う。

その他のペア

他に今年は、日撫地区で新規のペアから、1羽巣立ちし、また、郷公園内の仮設巣塔からは、待望の野生コウノリ(エヒメ)のペアから2羽が巣立ちした。袴狭では、メス同士のペア？が、巣作り、産卵した。孵化には至っていないが。

百合地のペアについては、最初の産卵に失敗し、現在第2クラッチでの子育て中である。このペアについては、次号でまた述べたい。



袴狭ペアが巣をかけた電柱



電柱に巣材を運ぶ袴狭ペア



古きをたすねて新しきを知ろう 昭和編

(コウノリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

過去の、「幼鳥は南下してどこで越冬したのか」「増えたペアとは一体だれなのか」を探る Vol. 3です。

前号に引き続き、昭和初期に増えたコウノリについて

前号で、豊岡周辺のコウノリは、①明治後期に1(あるいは2)ペアだったが大正初期から複数となり徐々に増えていった。②昭和9年には20ペアと最大になり、営巣地も円山川流域を中心に和田山から久美浜まで拡大した、ことを記録から見てきた。そして、増えていく様子、つまり、留鳥として毎年繁殖を続けたのか、外からやってきて増えたのかを探ってきた。当時の観察者たちは異口同音に、冬期間は、①ファミリーの親(ペア)は、降雪の少ない和田山ではその地に留まり、積雪地帯でも「かなり」留まったが「一部」は姿を見せなくなる。②その年に生まれた幼鳥たちは、全員が降雪直前に南下していった、と述べられている。

現在の豊岡のコウノリはどうか？ やはり、繁殖ペアは豊岡から出ず、幼鳥は出ていく個体が多い。ならば、今後のことを考えるためにも、過去の「幼鳥は南下してどこで越冬したのか」「増えたペアとは一体だれなのか」を可能な限り知っておきたい。そこで、みんなで考えようと呼びかけた。

読者(賛助会員)の一人、山下 さんから見解を書かれた手紙をいただいた。山下さんは、①南下とは大陸まで行った可能性がある。②増えた個体は戻ってきたもので、鮭のように回帰性本能があるのではないかと。現に、今でも遠くに飛んで行った幼鳥も豊岡に戻っているし、と述べられる。なるほど。山下見解を基に、さら

に推測してみよう。「大陸まで行った幼鳥は、そこで大集団と合流して数年を過ごし、性成熟年齢になると恋人(鳥)を伴って繁殖のために生れ故郷に帰ってくる」と考えてはどうだろう？ 現在の研究者の論文にヒントはないだろうか。

現在の渡りルートからコウノトリの過去と未来を考える

下記の図は、2004年に東京大学大学院の樋口広芳教授がロシアやアメリカの研究者たちと共同で発表された論文(※1)に掲載されたものだ。1998年から2000年にかけて、13羽のコウノトリに発信器を付け、繁殖地・ロシア極東と越冬地・中国東南部の間の渡りの軌跡を人工衛星で追跡された図である。今年の1月に豊岡でも講演いただいたので、参加された方は記憶にあるだろう。

Ecological Research (2004) 19: 683-698

Network analysis of migration routes 691

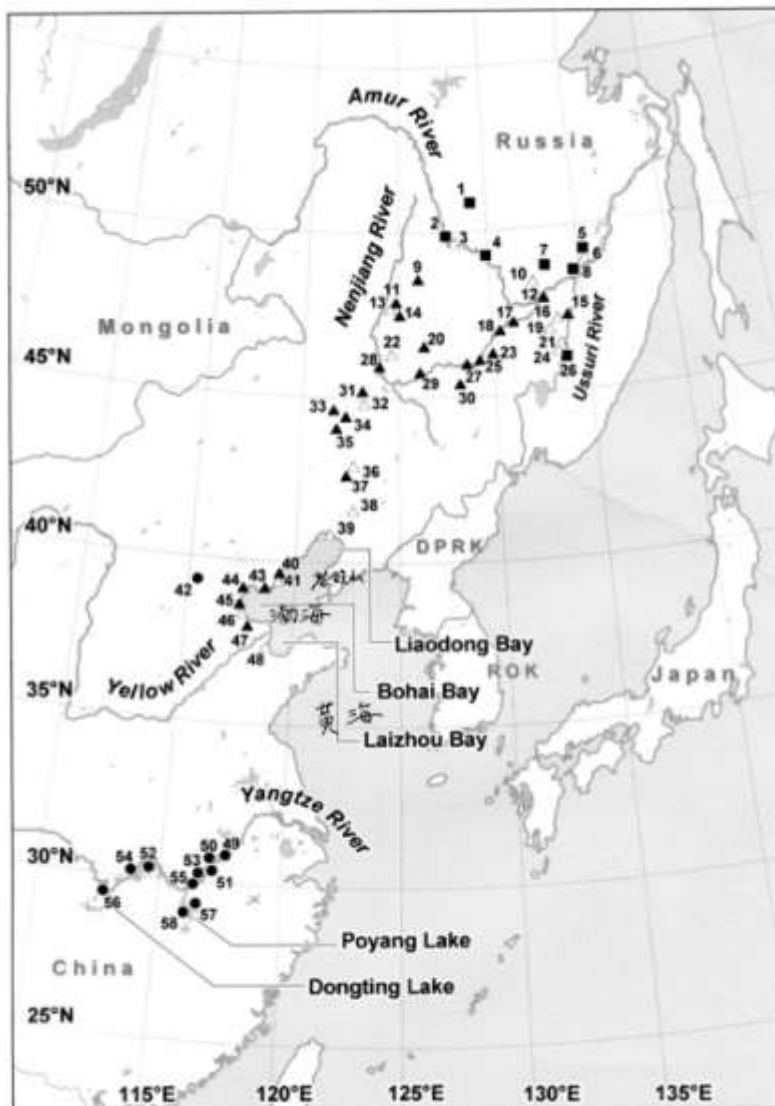


Fig. 5. Geographic locations of stay sites used by the 13 Oriental White Storks tracked via satellite in 1998 through 2000. (■), breeding (natal) sites; (●), wintering sites; (△), resting sites; (▲), staging sites. Site identification numbers (site-IDs) are appended to the corresponding symbols.

これによると、コウノリはアムール川中・下流域周辺を繁殖地とし、秋に南下して長江中流域周辺で越冬するが、樋口教授は中継地についても重要視されている。追跡調査したすべての個体が、渤海湾西部沿岸を停留地として利用しているのだ。このことから私は、次のように仮説を立ててみた。

- かつて(いつの時代まで遡るのかは不明だが)コウノリは、図の No36~37 付近から渤海東西沿岸に舵を取る集団と黄海東部に行く集団とに分かれて南下し、越冬地に向かった。
- その一部は黄海東部沿岸の朝鮮半島で越冬し、さらにその一部は日本まで渡って越冬した。(もちろん、ロシア極東から北海道へ渡るルートもあっただろう)
- 朝鮮半島や日本では、(いつからか)その地に留まって繁殖行為する個体が出現しだし、やがて生息域が拡大する。(以上については、前号のとおり、「鳥獣報告集」に中国渤海沿い老鉄山から1933年に南下報告が、朝鮮半島黄海道から1930年に繁殖例がある)
- 日本で留鳥化した個体群のうち、繁殖ペアは移動したとしても国内に止まり、幼鳥は積雪前に南下して沖縄諸島・台湾・中国東南部に渡り、渤海沿岸ルートで渡ってきていた集団と合流した。
- その後、日本の個体群は明治初期に激減した(つまりは親鳥が殺された)が、出石では親鳥は保護されて(周辺に)留まり、生まれた幼鳥たちは南方で集団の中で成鳥となり、ペアを形成して繁殖期に豊岡周辺に帰ってきた(※戦前の死亡個体から検出されたDNAも、同一母系のものと相違母系のものが混在する(前号参照))。繁殖後は、また親は留まり、子は出て行った。その数年後に新ペアとなって帰ってきたものは、自分たちの領域(テリトリー)を持つために近隣に営巣する。これを繰り返しながら、約30年の年月をかけて生息域は和田山から久美浜までに広がった。

〈あながち、荒唐無稽ではないと思うんだけど…。反論、受け付けます〉

※1 Ecological Research (2004) 19 (6) 683-698 「Network analysis of potential migration routes for Oriental White Storks(*Ciconia boyciana*)」 Hiroto SHIMAZAKI,¹* Masayuki TAMURA,² Yury DARMAN,³ Vladimir ANDRONOV,⁴ Mikhail P. PARILOV,⁴ Meenakshi NAGENDRAN⁵ and Hiroyoshi HIGUCHI⁶

これからのコウノリの保護策と未来像

こうして見てくると、これからのコウノリの保護策と未来像は極めて明確だ。ひとつは、ロシア極東→中国東北部→渤海西部沿岸→中国東南部の環境保全。もうひとつは、朝鮮半島、日本での環境復元である。具体的には、渤海・黄海東部の朝鮮半島西海岸沿いの渡りルート保存・再生と韓国・日本において親鳥の繁殖・越冬地を再生することである。(幼鳥の移動・渡りについては、当面は追跡調査を)

コウノリは大型の渡り鳥で、将来にわたって種が健全に暮らしていくには、ロシア極東、中国東部、朝鮮半島、日本、台湾の地が必要だ。私たちは、まず豊岡から飛んで行った先の町との自然再生連携を、そして各国との連携もそろそろ視野に入れる必要があるだろう。

さて、話を歴史に戻そう。昭和9年に20つがいまで増えた当地方のコウノリは、この年を境に減少に転じてしまい、苦難は昭和の終わりまで続くこととなる。最初の減少の大きな要素は戦争だ(と思う)が、その実態はどうだったのか? 次号で、戦中・戦後を見てみよう。



子供ラムサール（蕪栗沼）に参加して

（豊岡高校2年 西浦拓也）

僕は5月に豊岡で開催された「生物多様性シンポジウム」（日本学術会議）に参加し、いろいろな方と話をしたことで驚いたことがあります。それは、コウノトリファンが多いことです。

全国各地から来られた方たちがあんなにコウノトリに熱心でいてくれたので感激しました。その上、発表はどれも素晴らしかった！



先生方の発表を聞いてから、僕は「生物多様性」ということを深く考えるようになりました。そんな時、市共生課の宮垣さんに蕪栗沼にいかないかと誘ってもらい、僕は、「生物多様性のことを理解するチャンスがきた！！」と思いました。

実際に行ってみると、いろんな都道府県で活動している子供たちの立派さにビックリでした。小学生でさえ自分の意見をしっかり述べるのですから！もちろん、中学、高校の人たちも凄かったです。

1日目は田んぼでフィールドワークをしました。

今まで田んぼにあまり視点を置いていなかったのですが、実際に現場に行ってみると、田んぼで暮らす生き物がそれぞれの役割を果たしていることが分かりました。

カエルは田んぼにいる害虫を食べ、生えている雑草は食べることができたり、葉の代わりになったりと、その役割は実に様々でした。

その夜、各湿地の活動発表があり、僕は3番目に発表することになりました。待ち時間の間、アドリブを利かすか原稿通りに進めるか迷いました。結局アドリブを利かせました。

その結果、皆さんには

「一番思いが伝わる発表だった」と嬉しい一言を頂きました。

2日目は討論会でした。

僕は田んぼの生き物に重点を置いて質問、提案をしました。残念ながら採用はされなかったものの、確かな手ごたえは感じました。

この行事を通して、生物多様性とは何か、そして自然再生はどういうことかといったことが少し理解できたような気がします。

今後、これを活かし、豊岡の自然を作るために貢献できたら良いなと思います。

僕にこのような素晴らしい体験をさせてくださった宮垣さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

また、このような機会があれば、ぜひ、僕を呼んでください。いつでも飛んで行きます！！



田結地区での湿地整備作業に参加！！





5月～7月編

6月8日(火曜日)出勤途上の6時45分、城崎大橋を渡ると、巢塔には1羽しか見えません。

「巢立ったんだ！」ハチゴロウの戸島湿地に近づくと、満面笑顔のカメラマンの方々。大急ぎで管理棟へ行くと、



「森さ～ん、飛んだあで」とK氏の声。

「どっちですか？」

「小さいほう」

「へええ～」



(6月11日ヒナ2羽揃いました)

「飛んだ！」ヒナAがヒナBの元へ、すう～と飛んで行くのを見届け、私はK氏のところへ行き、飛び上がって喜びました。4日間の朝を一緒に過ごしたK氏とは、想いを共有して親しみが増し、かけがえのない時間を過ごせました。

管理棟勤めをしていなかったら、こんなに心が震えるような瞬間はなかったかも知れません。人間以外の命が、こんなにも愛おしく感じられた経験は、私を優しくしてくれています。



実は、巣立ちをした小柄な方のヒナBは、座り込んでばかりで、ジャンプの練習もあまりしていないように見えていたのです。聞いたところでは、6時15分に飛び立ち、管理棟上空を旋回して県道沿いの電柱に降りたとのこと。6時52分に巣塔に戻りました。巣塔の中では、残されたヒナは伏せてしまって動きません。昨日までの様子と反対で、なんだか可笑しくて。でも、巣塔に1羽、じっと下を見つめている姿を見ていると・・・なんとも言いようのない気持ちになってきます。

来館者の皆さんも「怖いわなあ」「飛びたいんだろうなあ」「そおれっ！それ、それ！」と声援を送られたり、「気になって・・・」と何度もお越し下さる方も大勢おられ、電話でのお尋ねもたくさんありました。どの言葉にも、飛ぼうとする鳥へのエールと優しさが溢れています。

6月11日(金曜日)5時20分、城崎大橋手前から見ると巣塔には1羽しかいません。

そーっと管理棟に入りフィールドスコープを覗くと、ヒナAは妙に落ち着いている？ようです。今朝の空気は違うような気がするな・・・。ヒナBと親鳥は湿地に佇んでいて、ヒナBは時々巣塔へ戻り、飛立ちをして促しているように思えます。

6時には母鳥が巣塔下に移動して、淡水域では父鳥とヒナBがじっと待っています。「森さん、もうすぐ飛ぶで！」とK氏。待つこと37分、

2007年7月、百合地の人工巣塔から巣立とうとしている『ニッタン』(J0003)を、大勢で見守っていたとき、豊岡市は優しさで満ちていたような気がします。コウノトリのいる風景が当たり前になっても、あの時の気持ちを忘れないでいたい。『ニッタン』は、今も行方不明のままですが・・・、

豊岡市ではニッタンの誕生日が、『生きもの共生の日』に制定され、「たくさんの人の想いを乗せた命のレレーが繋がった日」だと、いられています。私は、ニッタンの巣立ちは、「たくさんの人がコウノトリへ想いを馳せた日で、命への賛美の日」だと思っています。永い年月をかけて多くの人々の努力でやっとここまで来た『コウノトリ野生復帰』。これからも毎年訪れるであろう繁殖の季節は、最もわかりやすい命の日で、生まれる命・育とうとする命を見つめ、自然の恵みや悦びに感謝して大切にしていきたいものです。

巣立ちの季節に、初心に戻り優しさを取り戻すこと・・・。
自己満足でもいいじゃあない？

(戸島湿地管理棟 森 薫)



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

<2010年7月31日までの入会会員名簿>

法人会員

(有)一景 神奈川大学法学部東郷ゼミナール (株)川嶋建設 喜多見印刷(株) (有)城崎環境
木村電気商会 (株)くまた建工社 株式会社毛戸工務店 (株)古まん 三栄産業(株) 田結地区
但馬調剤薬局 つばきの旅館 ときわ別館 戸島営農組合 (株)西村風晃園 (株)西村屋 (株)北星社
マリヤ医科興業(株) 円山川漁業協同組合 (株)緑風

個人会員

赤松和弘 浅田千恵子 荒田邦夫 イー・シー・ワン 石田邦三 石田比奈子 伊藤博樹 稲葉康介
井上明美 井上俊宏 井上朝為 井上基 今井隆男 岩崎正幸 印南宏 上田篤 植村久樹 梅本章弘
大井小枝子 大澤幸雄 大谷賢司 大伴成 大橋一成 大林幹 大家美代子 岡田正司 岡本靖子
小田春夫 尾畑富久雄 香川正行 門脇明好 金澤郁子 金子泰久 神信浩一 河原久一 河村隆司
菊内三郎 菊地功 菊地寿美枝 菊地義尚 本多玲奈 岸田政則 北尾行雄 北垣吉人 木谷妙子
木下哲学 木村雄二 久保千賀子 熊原優樹 熊原政子 栗山武夫 河野博 小浦久子 小西一司
小西俊郎 小林慎治 小林友子 斎藤哲也 彭城慶子 坂巻宗男 坂本京子 坂本昇造 坂本真一郎
佐藤肇 佐藤裕幸 沢田秀実 澤田恭成 四角秀夫 四角美也子 四角美代子 重松勝房 島本久子
下山薫 正垣昭夫 杉山隆一 瀬川孝光 関秋夫 瀬古智貫 瀬戸義泰 瀬渡友一 田内ひとみ
高嶋京子 高嶋信之 竹下邦明 田中秀樹 谷廣美 谷垣知子 谷口和夫 谷口進一 田畑鎮雄
千代延哲也 チョン・クワン 津田博 筒井八郎 手塚正人 栃尾宣枝 土肥博行 中尾光夫 中貝尚子
中貝宗治 中川富紀子 永田昌子 中野裕次 中村慶子 中村由美 西垣晴代 西村文宏 西村美恵
西村禮治 登里忠嗣 橋口英二郎 橋本章 橋本昌孝 羽田野泉 花房弘史 花輪伸一 浜田健治郎
早川真 原実 樋口忠幸 日野西直子 平岡勇介 福成孝三 藤野秀子 藤原秀雄 舟木佐世子
細田百合子 堀田和則 本多清 本田裕子 松井裕 松岡節芳 松岡展子 松岡正美 松島一夫
松島久美子 松島興治郎 松村芳子 丸山喜久 三嶋勝徳 溝邊久美子 湊崎康雄 宮西年規 六浦拓男
村上俊明 村山直康 森信弘 森貞淳一 八木孝子 柳生博 柳澤かほる 山下秀明 山田均 山本進

山本晴久 山本好美 横田治彦 吉田隆一 吉谷功 若宮慎二 若森洋崇



コウノトリ湿地ネット正会員名簿

荒川秀夫 青木浩芳 秋山稔 伊賀二郎 石原広恵 井上哲郎 植木哲章 宇根豊 大平貴代 岡憲司
 桶生欣一 角谷和一郎 神谷勝 川本寿信 菅真一 菊地直樹 木谷倫哉 久下直哉 毛戸勝 小谷繁子
 小寺澤啓司 佐竹節夫 佐藤稔 杉森文夫 田岡茂 高石俊一 太垣克己 高橋昌博 田上圭児
 武田禎子 武田広子 武田雄吾 竹中廣次 玉岡昇治 月本陽蔵 土屋壽久 永田雅子 友田靖彦
 中野慶子 中野義樹 中村美一 二位岡野 西村英子 新田佳代 間泰子 早川貞夫 林晴美 原良式
 船野早苗 古田恵子 古池信幸 松井敬代 三橋弘宗 箕輪多津男 宮垣健生 宮垣芳和 宮村さち子
 宮村良雄 森薫 八木昭 山本義弘 山本進 結城竜則 由留佐泰子 横田一博 横田登代子 吉岡武雄
 吉田幸子



コウノトリ湿地ネット役員名簿

去る6月5日、当会の2010年度総会を開催し、事業計画の外、新役員が次の通り決まりました。任期は2年間です。

代表	佐竹 節夫
副代表	横田 登代子
事務局長	森 薫
理事	荒川 秀夫
理事	宮村 良雄
理事	由留佐 泰子
監事	菊地 直樹
監事	毛戸 勝

コウノトリ湿地ネット入会のご案内

湿地ネットでは、「正会員」「賛助会員」となり、活動を支えてくださる方を募っています。

※正会員 **入会金2000円、年会費2000円**（積極的に、会の活動を支えてくださる方）

※賛助員会 **年会費2000円**（年6回ニュースレターをお送りします。その他自由に活動にご参加ください）

継続会員の方で今年度の振込みがまだの方、振込み用紙を同封しましたので、会費の納入をよろしくお願ひします。

振込先

郵便振替 **加入者名 NPOコウノトリ湿地ネット**
口座番号 00900-0-194128



湿地ネット代表交代に際してごあいさつ

(コウノトリ湿地ネット前代表 横田登代子)

雨の多い季節になってきました。草花の勢いが止まりません。湿地の中の草も大変なことになってきています。その中で、戸島の幼鳥たちは、悠々と採餌したり休憩したり・・・いつまでいてくれるのかな、ずっといてほしい期待と、外での経験もしてほしいような複雑な気持ちでいっぱいです。代表として、コウノトリ、湿地に色々と教えてもらいました。会員の皆様には、いろいろご協力頂き、有難うございました。本年度から、副代表として、さらに頑張っていこうと思いますので、宜しくお願い致します。

(コウノトリ湿地ネット新代表 佐竹節夫)

横田登代子さんから代表職をバトンタッチしました。若手が継ぐのが理想ですが、残念ながら高齢化です。そのため、真夏は年々「酷暑」になりつつありますが、外仕事は体力に合わせてやりますので、よろしくお願ひします。

うれしいことではありますが、やたらと忙しくなってきました。ハチゴロウの戸島湿地だけを見ても、一般入場者に加えて視察、取材、学習、ボランティア等々の方たちが多くなり、組織力アップの必要を痛感しています。「少しの時間なら」「自分の得意なことなら」こんな方、歓迎です。

「編集後記」

丹後中央病院の売店で買い物をして、足元を見ると袋入りのジャガイモとタマネギが・・・『院長作 100 円』とある。横の掲示板には、「理想は高く、やることは雑巾がけ」「おにぎりよりも柿の種(昔話のさるかに合戦)」を座右の銘としていると書かれています。使命感に燃えておられる先生と、湿地作業に汗をかく仲間と姿が重なり・・・つい、ジャガイモとタマネギを買い求めました。(森 薫)

今回のパタパタ発刊、1ヶ月遅れになりましたことお詫び申し上げます。力不足でとうとう遅れてしまうことになってしまいました。内容は、頑張ってます…………。(宮村)



コウノトリたちも、豊岡の風景になじんできました

